それは素敵な休暇の過ごし方　～４日目～

阿佐木 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それは素敵な休暇の過ごし方　～４日目～

【Ｎコード】
Ｎ２７８２ＢＡ

【作者名】
阿佐木　零

【あらすじ】
ｐｉｘｉｖにて投稿した東方ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作です。八雲家に居候している四季映姫だったが、友人の藍に頼まれて橙の様子を見に行く。するとそこには妖精たちと遊ぶ橙がいて、心配していた藍に大丈夫だと報告するのだった。

前日までのあらすじ

まともな人柄の友達が出来た。嬉しい。

□■

ふにょん。

たぶん、その感触を言葉にすれば一番適切かつ伝わるのが今の言葉だ。

指に力を入れてみたら、もにゅもにゅと柔らかくも弾力のある感触が返ってくる。

「あっ、ふっ……」

でも、何かがおかしい。

少なくとも、物は私が力を入れてもこんな艶っぽい声を出さない。

出すわけがない。

「んんぅ〜」

目がしばしばする。

昨日は楽しくてつい夜更かしをして藍と語り明かしてしまったから、まだ寝足りない。

ぼうっとする頭で目をこすりながら、私が今頭を埋めている物体

を確認する。

「いやん♪」

むくりと上半身を起こすと、私が寝ぼけて抱きついていたソレが、まるで悪戯がバレた子猫のように冷や汗を垂らしているかのように乾いた笑いをあげていた。

「……ひとつ訊いてもいい？」

なんとなく。

なんとなくだけど、いつものようにただ悪戯したかっただけなんだろうなとは思うけど、それでも訊かずにはいられない。

「なぁに？　あ、自分には無い谷間にもう一度飛び込みたいっていうのなら、飛び込んでもおっけーよ？」

地獄行き。

ああもう朝からいつもいつも毎日毎日同じように忍び込んで。

もうテンプレのように――ここ最近恒例となった叫びを私は上げる。

「大きなお世話よ、馬鹿ぁ――――――――！！」

■□

まったく。

あれからすぐにスキマを使って紫は逃げた。逃げられてしまった。

後で絶対にお仕置してやる……。

「――おはよう」

「おはようございます、四季様」

「ええ、おはよう小ま」

あれっ？

いつものように私が挨拶を返すと、仕事をしているはずの小町が何故だか八雲家の食卓にいた。

それでいて当たり前のように食卓についていた。

「おはよう、映姫」

「う、うん。おはよう藍」

悪いね、と小町は藍からご飯を受け取っている。

何かがおかしいが、どうにもついていけない。

これじゃないけない、と私は一度かぶりを振ってから、当たり前の疑問を投げかける。

「小町。仕事はどうしたの？」

「休憩中です」

「そう」

小町の能力を使えば、ここまでだって短い休憩時間を利用しても来られる。
わかる。それはわかるのだが。
「ところで、今ってまだ勤務時間よね？」
「……ぎくっ」
「ぎくっ？」
「あ、あはは。やだなぁ四季様。ちょっと早めに休憩に入ってるだけですよ」
はぁ。
朝から頭が痛くなる事ばかりだ。
「いいじゃないか。彼女は君が心配なんだよ、映姫」
「ちょ、こら狐！」
藍の言葉に慌てているあたり、事実なのだろう。小町は慌てて藍の言葉をかき消そうとしているが、もう手遅れだ。
「――食べ終わったら仕事に戻りなさいよ？　私は……良い休暇になっているから」
「四季様……はいっ」
まったく、嬉しそうにして。
私は仕方ないなぁという顔をして、小町の隣に座る。

「ふふ、素直じゃないね」

「何の事だかわらかないわね」

「君も紫様とあまり変わらないと思うよ、最近」

言って、藍はいつものように朝ごはんを並べてくれる。
私と小町と藍、そして橙の分。紫は逃げてしまったので、お茶碗だけ伏せてある。
たぶん朝は戻ってこないに違いない。

「藍様～、おはようございます～」

と、とことこと橙が起きてくる。
眠たいのかまだ目を擦っている。おそらく、昨日はしゃぎすぎて疲れてしまったのだろう。

「ああ、おはよう橙」

「んにゅう～」

「まったく……お客様の前だというのに」

「んん～？　あ、小町だぁ」

寝ぼけている状態のまま、橙は手を挙げる。

「久しぶりだね。顔洗ってきなよ」

「うん～。あ、今日のお昼も遊ぼうね～」
「……ああ、そうだ――げっ」
「さ、行こうか橙」
「は～い」
藍は橙を連れて奥へと引っ込んでいく。顔を洗って目を覚ましてくるのだろう。
でもまぁ、それはいいのだ。
それは。
「今日のお昼”も”？」
「ごちそうさまでした！」
パンっと手を合わせ、小町は消えた。
そりゃもう脱兎の如く、逃げて消えた。
……まったく。
□■
「おや、小町は帰ったのかい？」
「ええ。逃げるようにね」
「ふふっ、なるほど」

小町が使った食器を片付け終わった頃に藍は戻ってきた。
橙もすぐに姿を現し、ばっちりと目が覚めたのか元気いっぱいの様子だった。

「いただきます」
「いただきまーす♪」
「はい、召し上がれ」

そうして食事が終わった後、

「じゃ、行ってきまーす！」

すぐに橙は外へと駆けていった。

私は食器を洗いながら、誰ともなしに呟く。

「元気なものね」

「友達が出来てからというもの、いつもだよ」

その声が少しだけ、遠くを見て言っているような気がして。

「寂しいの？」

「さて、ね。喜ぶべきだとは思うのだけどね。だってそうだろう？」

藍は大げさに肩を竦めてみせて、

「友というのは得難い経験を与えてくれるものだからね」

「うん、そうね」

それで、藍。

「本音は？」

藍はぽかんと一瞬固まった後、やがて恥ずかしそうに顔を背け、いじけた声音で呟いた。

「……やっぱり君は意地悪だね、映姫」

■□

深緑の森を見下ろしながら飛んでいると、やがて大きな湖が見えてきた。

「あそこね」

目をこらして見れば、なるほど確かに湖の畔に小さい影がいくつも見える。

私は藍に言われた言葉を思い出しながら、妖精たちに見つかる前に森の中へと身を隠す。

「橙がどうしてるのか聞いてきて欲しい、ね」

親ばか。

うん、どう考えても親ばかだ。

しかも自分がしゃしゃり出ると橙の居場所が無くなってしまうか

もしれないと考えてしまうくらい、心配性だ。
しかし聞くまでもなく、湖の方から聞こえる声は楽しそうなのだけれども。
頼まれた手前、踵を返すわけにもいかないんだけどね。
「……ふむ」
木の影からこっそりと顔を出してみる。
「わはっ♪　チルノちゃんの負けー！」
「んな――！？　あたいが負けるわけないじゃない！　今のはアレよ、ノーコンってやつ！」
「それを言うならノーカンだと思うよ、チルノちゃん……」
あれは確かチルノだ。ついでに一緒にいるのが確か――大妖精だったはず。
他にもいろんな妖精達が混ざっている。
さながらちびっ子達の広場というところか。元気が溢れているのがこちらにまで伝わってくるようだ。
それに比べて私は――
「……考えちゃ駄目よ、映姫」
自分に言い聞かせる。
本当、どうしてこんな覗き見なんてしているのだろう。

「あたいが負けるわけないじゃん！　だってあたいって最強なんd」

あ。

目が合っちゃった。

「？　どうしたの？」

チルノの視線につられるように大妖精がこちらへと顔を向ける。

が、その前に、

「説教ババアが出たぁ――――！！　みんな逃げろぉ――！」

ちょっ！？

わーっと雲を散らすようにして妖精たちがあちこちへと散っていく。

「誰がババアよコラァ！！」

が、怒鳴りちらした所で既に後の祭りである。

妖精達はすばしっこい。橙もノリというか紛れ込んでいたのか、もう姿が見えない。

「……はぁ」

私は嘆息し、とりあえず近くにあったモノを掴んだ。

「ひっ」

びくっと身をすくませる彼女に、私は極力安心させるように笑み

を浮かべる。

「ねぇ、ちょっと話があるんだけど……いい？」

「は、はいぃ！」

どうしてか、大妖精は震えていた。

□■

「は、はぁ。そういう事だったんですか」

怯えていた大妖精に事情を説明すると、肩の力が抜けたようだった。

さっきより表情は柔らかくなっている。

「……納得してくれて何よりよ」

でも私としてはやっぱり釈然としない。

「あはは……チルノちゃんには私からちゃんと言っておきますから」

「お願いね」

妖精にしては大人しい娘だ。物腰を見る限り、みんなのお姉さん役に近いのだろう。

そんな大妖精はぽつりぽつりと言葉を選びながら語ってくれた。

「橙ちゃんは良い娘ですよ。チルノちゃんやルーミアともとっても仲が良いし、他の妖精のみんなともすっごく仲良なんです」

くすり、と。
漏れる笑みを隠しながら、大妖精は告げる。
「もちろん、私もです。だって、お友達ですから」
「――そう」
その様子だけで充分だった。
こんな良い娘が友達と言ってくれているのだ。橙は藍が心配してなくてもきっと大丈夫。
「ありがとう。時間を取らせちゃったわね」
「い、いえ！　四季様もお疲れ様です」
苦笑いと浮かべる大妖精に、私は一本指を立てる。
「例えばだけど、貴方が橙から何か頼まれたとして、それを大変だと思う？」
「そんな事ないです！　だってお友達の頼み事なんですもん！」
だから、私は片目を瞑ってみせる。
「なら、私も同じよ」
大妖精はしばらくキョトンとした後、やがて声を出して笑った。
「あはは、そうでしたね。だって――大切な友達に頼られてるって

事ですもんねっ！」

■□

「って事らいしわ」

八雲家に戻った私は、藍に意気揚々と報告していた。
これなら文句もあるまい。

が、私は親ばかというのを甘く見ていたのかもしれない。

「肝心の橙はどうだったんだい？」

「楽しそうだったわよ？」

「うん、それはわかるんだ。問題はね」

ガシッと藍は私の肩を掴み、顔を寄せる。
いつもの落ち着いたものではなく、鬼気迫る顔をしている。

「橙が転んで怪我してないかとか変なモノを拾って食べていないかとか橙の行く先に米粒ほどの石ころが落ちていないかとかそういう事は？」

「お前は何を言っているんだ」

親ばかここに極まれり。
いつも放置していたのは橙の自主性を重んじていたからで、心の中ではきっと世界滅亡規模の戦いが毎日繰り広げられていたのだろう。

「っていうか、貴方は橙にどんな友達が出来たのか心配していたんじゃないの？」

私はてっきりそうだと思っていた。

だが、藍は「わかっていないなぁ」と嘆息し、

「橙が選ぶ友達が悪い奴なわけないだろう？」

その時の私の呆気に取られた顔は、おそらく生涯でもほとんど見られないものだったろう。

当たり前のように橙を信じ、橙の信じた友を信じてる。そしてその上で橙を心配している――何の事はない、私の親友はそういう奴だったのだ。

「ねぇ、藍。貴方にひとつとっておきの渾名をあげるわ」

「何だい、突然」

私は知っている。

こういうのにつけるたったひとつの渾名を。

それは――

「親ばか」

「――ふっ、はは」

もちろん本人にだって自覚があるのだろう。

何せ目に入れても痛くないくらい可愛がっているのは端から見ていてもわかるのだから。

「いや、最高の褒め言葉だよ。だけど映姫、
――君はやっぱり少しだけ意地悪だね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2782ba/

それは素敵な休暇の過ごし方　～４日目～

2012年1月7日01時50分発行